皆さんの悩み、お聞きします

ケアラーの窓から Vol.23

島根大学教授
宮本（みやもと） 恭子（きょうこ） さん

ヤングケアラー支援のポイント4選

1. 本人と家族の意思を尊重しながら、本人の選択肢を増やす
2. 一人で抱え込まなくても良い相談場所などを提示し、なければ共に創る
3. 子どもとつながり、地域で見守る仕組みが大切。常に気にかける視点を持ちながら支援する
4. ヤングケアラーが助けを求める力、その助けを受ける「受容力」を高める働きかけを行う

ケアラー支援講演会を開催

「見守り・支援ってなんだろう?～ヤングケアラーの子どもたち～」と題した、ケアラー支援講演会が９月28日、Ekiで開かれました。

近年テレビや新聞などでも大きく取り上げられているヤングケアラーの存在。第一部となる基調講演では、昨年町が行った実態調査の分析を担当した島根大学教授の宮本恭子さんが支援に関する講演を行いました。

宮本さんは、町内にヤングケアラーおよびその予備軍が１学級に５～６人はいると話し、そのほか支援の考え方や町の現状を講演。また、地域での支援は当事者の子どもだけではなく、高齢者や介護を行う家族、「きょうだい」なども含めたものであり、それぞれの支援に「気づき」「連携の土壌づくり」「地域一体で行うことの大切さ」を呼びかけました。

会場には110人が集まり、地域の支援のあり方を学びました

パネリスト皆さんの 声

第二部では、「気づく・つなぐ・地域で支える」をテーマに、子育て支援、地域の見守り、福祉施設の視点から、それぞれの活動やケアラー支援への思いを語る意見交換を行いました。

当日の様子はYouTubeで公開しています▶

栗山町住民保健課
松田（まつだ） 茂弓（もゆみ） 保健師

保健師は、子どもから高齢者まで幅広い世代への支援や取り組みを行っています。家庭訪問や面談を通して、その方の悩みを受け止める大切な役割です。成長や喜びを一緒に感じられる存在でありたいです。

特定非営利活動法人あい（札幌）
理事長 吉川（よしかわ） 淳也（じゅんや） さん

福祉施設の運営、放課後等デイサービスや子ども食堂の活動などを通して、ヤングケアラーの多さに驚きます。同じ「まち」に住む一員として、近所付き合い、関心を持つことが第一歩。今後も小さな「命」を守るため、官民一体となって向き合います。

栗山町社会福祉協議会
業務係長 冬野（ふゆの） 大希（ひろたか） さん

日頃より、ケアラーサポーター（傾聴ボランティア）による訪問活動を行っています。活動を通じて相談に来られる方や訪問希望の世帯も増えており、「顔の見える関係」ができ始めていると感じています。

栗山学び隊 No.42

地域で輝く介護福祉学校と栗山高校に通う皆さんの様子をお届けします

福祉の先進国、肌で感じた現場

坂牛（さかうし） 雄大（ゆうた） さん・米澤（よねざわ） 蘭（らん） さん・旭岡（ひのおか） 琴巴（ことは） さん
（介護福祉学校２年）

４年ぶりの福祉の先進地・フィンランドへの留学事業。海外自体が初めてという３人の学生が派遣され、無事に帰国しました。

「貴重な経験でした。町の代表として派遣していただき感謝申し上げます」とリーダーの旭岡さんが話すように、ホームステイや調理体験、保育・介護施設での交流など、約２週間の研修を有意義に過ごしました。

坂牛さんは「限りある研修の中で、時間も意識しながら学べました」と振り返り、米澤さんは「海外特有の相手に干渉しすぎない文化が介護の現場でも感じました。それが故に誰にでも平等に関わる姿勢は、日本では味わえない視野の広がる経験でした」と、働く姿勢の違いについて学んだと語りました。

今後３人は、活動報告会を行う予定です。

責任感と自由な発想、お互いの目標へ

谷内（たにうち） 友（とも） さん・干場（ほしば） 柚希（ゆずき） さん（栗山高校２年）

中学校からの親友でもある美術部の２人。いつも和やかな雰囲気で、好きな絵を描いているそうです。

現在は、今年入部した１年生２人を加えた４人で活動中。部長の干場さんは「去年までいた先輩が卒業したことで、その存在の大きさを感じています。活動のメリハリ、指示出しなど正直まだまだです。もっと責任感を持たないと」と話します。

ただ、高文連では干場さんが最高賞の優秀賞（全33作品が選出）、谷内さんは奨励賞を獲得。活動とともに技術も磨かれていることが伺えます。谷内さんは「他の優秀作品の自由度に驚いた。自分の自由な発想を意識して制作したい」と話します。

活動の姿勢・技術にそれぞれ課題と目標を持つ２人。部として個として、今後の成長に繋がることでしょう。

高文連で入賞した２人の作品。谷内さんの作品「me-time」（左）干場さんの作品「ともだち」（右）